

人文学報第 513-13 号抜刷

ディケنزにおける信頼と確信
—— ウェイド、ハヴィシャム、ジョージアナ

中 村 英 男

首都大学東京人文科学研究科

2017.3

ディケンズにおける信頼と確信

—— ウェイド、ハヴィシャム、ジョージアナ

中 村 英 男

基本的信頼の欠如

アンソニー・ギデنز Anthony Giddens の提示する自己成型の枠組みに沿って考えるならば、幼少時の生育環境が自己形成において根本的な影響を与える可能性があるという。発達のごく初期の段階で他者に対しての基本的な信頼を築けるかどうかによって、矛盾をはらむ現実に対処出来るか否かに大きな影響を及ぼすのだという。ギデنزは次のように説明する。

The trust which the child, in normal circumstances, vests in its caretakers, I want to argue, can be seen as a sort of *emotional inoculation* against existential anxieties — a protection against future threats and dangers which allows the individual to sustain hope and courage in the face of whatever debilitating circumstances she or he might later confront. Basic trust is a screening-off device in relation to risks and dangers in the surrounding settings of action and interaction. It is the main emotional support of a defensive carapace or *protective cocoon* which all normal individuals carry around with them as the means whereby they are able to get on with the affairs of day-to-day life. (*Modernity and Self-identity* 39-40)

「感情的な保護皮膜」(上記引用参照)としての基本的な信頼を持てなければ、

人は現実全般に対しての存在論的な不安に直接常に晒される事になる。それはいわば世界という現実を理解する鍵を持たぬまま、世界に放り出されるに等しい。チャールズ・ディケンズ Charles Dickens の作品には、そのような世界という他者の総和に対しての基本的信頼を欠いたと思われる人物の姿が描かれている。『ジョージ・シルヴァーマンの説明』 *George S silvermark's Explanation* (以下『説明』と略記) における事実上遺棄された子供シルヴァーマン Silverman もその一人である。彼は悲惨な状況に育った。青年となって、牧師の地位獲得に近づいていたが、ある女性に恋心を抱きながらも彼女との関係を進展させることを自ら避け、彼女と別の男性との関係を取り持とうとする。何がシルヴァーマンをそうさせたのか、リーヴィス Leavis による説明は以下の通りである。

But now the final and fatal repetition of this pattern of self-blame, self-sacrifice, and over-compensation for his guilty cellar-self takes place inevitably. Adelina Fareway the pupil is everything that could make George happy. He falls in love with her and he even sees that she unconsciously loves her very congenial young tutor [George Silverman]. Adelina is almost of age and will then possess her own fortune, and is of a 'daring, generous character': George could be rich and happy, and he is already a gentleman (. . .). But 'No. Worldliness should not enter here at any cost' —and George again overcompensates. He is not satisfied with forbidding himself to win Adelina, he must complete the sacrifice by putting her into another man's hands. (Leavis 285)

シルヴァーマンはアデリーナを自分の妻として得ることを、彼の存在に染み付いた自己利益の追求の証と見なし、より正しい自分を目指して自己犠牲の理想を追求しようとする。その結果、別の人物とアデリーナの結婚を取り持つという行為に及ぶのである。一見するとそれは自己利益の拒否のようにも見えるが、その行為について別の解釈も存在しうる。自分の娘が望ましくない結婚をさせられた事を知ると、アデリーナの母親フェアウェイ令夫人 Lady Fareway

はシルヴァーマンの真の意図を金銭目当てのものとして彼の強欲を非難する。シルヴァーマンがアデリーナを相手の男に、言わばあてがうことで間接的な利益を得ようとしていると批判するのである。

果たしてシルヴァーマンの真の意図はどこにあったのか。物語全体が基本的にシルヴァーマン自身の回想という形を取っているために、この作品がヘンリー・ジェイムズ Henry James の『嘘つき』The Liar に先行する形で、語られていない裏の事実を秘めた物語なのか、即ちフェアウェイ令夫人の見方が正しいのか、あるいはシルヴァーマンという人物が幼少期の悲惨な経験の結果としてある意味で病んだ精神の持ち主となってしまっているために、幸福を自ら断念することを望まないではおれない、そういう物語と理解すればよいのか（リーヴィスの見方はそれに近いと言えるだろう）。実のところ、それを十分な証拠をもって決定することは非常に困難に思われる。

それについてここでは、単に次の点を確認しておくにとどめたい。即ちフェアウェイ令夫人の指摘通りシルヴァーマンが自己利益を求める極端な強欲さを持つ人物であり、物語がその人物の意識的あるいは無意識的な弁明なのだとしても、あるいはリーヴィスらの解釈の通り、深くしみ通った自己への懷疑から幸福を断念しないではおれない人物の物語なのだとしても、彼をそのような存在にしたのは、幼少期の極端に悲惨な経験であり、それ故にリーヴィスの言い方を借りれば「地下室の自己」「cellar-self」を抱えた存在となってしまっているという点である。生育の初期の段階で無条件な信頼の対象となりうる適切な養育者を持たず、現実に対しての「感情の保護被膜」を持たなかったために、自己形成と関係性に関わるきわめて深刻な問題を抱えている人物である可能性がきわめて高いと考えられるだろう。

シルヴァーマン同様適切な養育者を持ち得なかったと思われる人物は『大いなる遺産』*Great Expectations*（以下『遺産』と略記）におけるマグウィッチ Magwitch である。燕を盗んでいる瞬間が最初の自己認識の時であるような人生（GE 319）が、果たしてどのようなものであったか、その生活の全体の悲惨さを推し量ることはきわめて容易であるように思われる。その意味でマグウィッチは、極貧の中で適切な愛情を与えられぬままほとんど放置された状態

で生育した、その両親が極貧の内に死んだ後に行政によって発見されたシルヴァーマンとほぼ同種の存在と見なすことが出来るだろう。マグウィッチもまた自己を意識し始めた最初の時期に、適切な人格的な信頼の対象を持ち得なかった事が強く推定される。信頼の対象となる養育者が、決定的に不在のまま育てたことが比較的克明に描かれる『説明』の主人公の場合と異なり、マグウィッチが実際にどのような状況で育成したのかは、作品の与える断片的情報から推定するしかない。しかし後に行政による介入の結果、教会からの庇護を受け牧師の地位にまで到達しようとする教育を受けられたシルヴァーマンと比較すれば、その生育状況が輪をかけて悲惨なものであった事は想像に難くない。彼もまた基本的な養育者を通しての他者への信頼を醸成できないような環境にいた存在だったと考えられるのである。

他者不在の世界

ただ、実は人格の最初の信頼の対象となる相手が適切に与えられるか否かは、必ずしも物質的な貧困や欠乏にのみ基づくものではない事を、ディケンズは知っていたように見える。ディケンズの作品の中で、恐らく最も社会という他者の集合体に絶望し、それに対して最もゆがんだ見方しかできなくなっている人物は、シルヴァーマンやマグウィッチのような極貧階層の出身者ではない。極貧階層出身者は適切な養育環境に恵まれず、信頼を醸成される関係を取り結べない場合がより起こりやすいと推定は出来るが、仮に社会的に上位の階層の出身者であっても何らかの事情で複雑な家庭環境に置かれた場合、適切な「保護被膜」を身につけられない場合があることをディケンズは知っていた。望めば常に（屈服感と共にではあるが）金銭的援助が自動的に受けられ（LD 524-525）、また同時に、社会的には比較的恵まれたと言って良い教育を受けられた人物が、他者に対しての強い持続的な敵意を示す存在に育っている事例が存在する。

『リトルドリット』*Little Dorrit*（以下『ドリット』と略記）における若い女性ウェイド Wade がそれに当たる。生育環境の違いから見れば、シルヴァーマン

やマグウィッチら極貧階層の出身者と、女家庭教師にもなりうる道を用意された物質的に言えば遙かに恵まれた立場のウェイドを同列に論じることは、いささか違和感を与えるものかも知れない。しかし、人格的に信頼の対象となるような存在を与えられるか否かは、物質的金銭的豊かさの多少によっては決定されないことを、この女性の歴史は教えてくれる。彼女の養育についても、ごく幼い段階での状況は省かれており想像の対象でしかない部分もあるが、養育の責任を果たすべき人々から愛すべき対象としての適切な関心を持たれなかったか、あるいはある程度適切な関心は存在したのにそれを本人が認識できなかったのか、いずれにしても最終的には他者に対しての適切な信頼を醸成できないまま成長した存在であり、そのゆがんだ精神のあり方の救いがたさが目を覆うべき典型的な例となっているように思われる。彼女が自分の懐疑に満ちた世界を提示する「自己虐待者」としての告白の冒頭にはこうある。

I have the misfortune of not being a fool. From a very early age I have detected what those about me thought they hid from me. If I could have been habitually imposed upon, instead of habitually discerning the truth, I might have lived as smoothly as most fools do. (LD 644)

他者に対しての強い全面的な懐疑。彼女をそのような存在にした状況はどのようなものであったのか。その複雑な環境については以下のように記述されている。

She is somebody's child—anybody's—nobody's. Put her in a room in London here with any six people old enough to be her parents, and her parents may be there for anything she knows. They may be in any house she sees, they may be in any churchyard she passes, she may run against 'em in any street, she may make chance acquaintances of 'em at any time; and never know it. She knows nothing about 'em. She knows nothing about any relative whatever. Never did. Never will. (LD 524)

一見卑屈とも見えるシルヴァーマンの他者への迎合的な反応とは異なり、ウェイドの社会や他者に対しての態度は病的と言って良い程、傲岸で敵対的なものになっている。彼女の主張に従う時、彼女自身が絶対に正しく、社会が絶対に間違っているという印象を読み手は受けとらざるを得ない。しかし主にシルヴァーマンの視点のみから語られ、他者の見解が間接的な形でしか読み手に届かない『説明』の場合とは異なり、『ドリット』の実際の読者は、ウェイドの見ている世界（『ドリット』のなかの「自己虐待者」Self Tormentor の章）を果たしてどう理解すべきなのかについて、あまり当惑を覚える必要はないように思われる。自己に都合の良い説明を提示し、その説明に基づいて彼女の周りの人々を判断するウェイドの存在が、他者の視線において客観的にはどう映るのか。その点について著者ディケンズの判断も、そして周りの登場人物の最終的な判断も概ね一致すると考えて良さそうである。ウェイドに向ってミーグルズ Meagles は次のように言い放つ。

I don't know what you are, but you don't hide, can't hide, what a dark spirit you have within you. I fit should happen that you are a woman, who, from whatever cause, has a perverted delight in making a sister-woman as wretched as she is (I am old enough to have heard of such), I warn her against you, and I warn you against yourself. (LD 323)

一時はウェイドに共感して彼女の世界に合流し、社会への敵意をウェイドと共有したタティコラム Tattycoram も、最終的には元の主人であるミーグルズのもとへ帰還し、次のようにウェイドについて証言する。

“Oh! I have been so wretched,” cried Tattycoram, weeping much more, after that, than before; “always so unhappy, and so repentant! I was afraid of her, from the first time I ever saw her. I knew she had got a power over me, through understanding what was bad in me, so well. It was a madness in me, and she could raise it whenever she liked. I used to think, when I got into that

state, that people were all against me because of my first beginning; and the kinder they were to me, the worse fault I found in them. I made it out that they triumphed above me, and that they wanted to make me envy them, when I know — when I knew even then, if I would — that they never thought of such a thing. . . .” (LD 787)

ウェイド同様、信頼すべき他者を幼少時に持ち得なかったであろう孤児タティコラム。彼女の抱く疎外感に対して鈍感で、自分自身の娘への愛情をタティコラムに対し無意識に見せつけてしまう善意の援助者ミーグルズ。そしてこれも事実上の孤児でありある意味でもう一人のウェイドだったかも知れない物語の主人公アーサー・クレナム Arthur Clennam ら、複数の視点からウェイドという存在に対しての証言を得ることで、『ドリット』という作品はウェイドの自己閉塞した世界を構成する視線が必ずしも明かさなことを、読み手に告げる。

ウェイドの物語る世界から都合良く排除された他者の視線を考慮に入れば、ウェイドの展開する閉じられた唯我論的な世界とは決定的に異なる客観的な世界が存在することが、明らかになっているように思われる。結局ウェイドは、自分が優越感を保てるよう、他者への絶対的な懐疑の中に閉じこもってしまった存在に過ぎず、現実の他者の世界が持つ多様性と可変性を意図的に無視することによって、偽りの優越感を保持しているのに過ぎない存在であることがわかるのである。例えば、タティコラムが最終的に認める様に、現実の社会においてはウェイドやタティコラムのような存在に対してある種の優越感を抱く者達がいるのとはほとんど同じくらい確実に「そのようなことは全く考えていない」(上記タティコラムの発言末尾参照) 人たちも無数にいたはずで、要するにウェイドの信じようとするほどに、世界という他者の集合体は一様でも固定化されてもいないのである。常に多様な可能性が存在し、そして何より変化する可能性に対して開かれた他者の集合体としての社会が現に存在している事を考慮に入れば、ウェイドの閉塞した世界（その中では常に彼女が他者の存在を優越感を以て眺めることが出来る）は、複雑さと多様性と可変性を持った現実を意図的に無視することで平板となった世界であることは明白である。ウェ

イドは矮小化された見方の中に逃げ込んでいる存在でしかない事がわかる。

彼女が抱えている問題は何か。それは、現実が単純な解釈によっては集約しきれない多様性と複雑さを常に備えているにも関わらず、彼女がそれを意図的に無視しているために、結果として可能性の開かれた世界を経験できない状況に自らをおちいらせているという点にある。彼女は自分にとって都合の良い見方が充満する世界に、ただ耽溺し続けるだけの存在となっているのである。タティコラムが最終的に認めた現実の多様性と可能性への開放性、そしてそこから必然的に生じる予測不能性。ウェイドはそれらを言わば意図的に無視し、常に誰もが自分を蔑視し憐れむことで優越感を抱いている世界を想定し、その構造を見抜いている存在としての自己を他者に対して優越した存在と見なし、そのような自己満足の世界に浸っているに過ぎない。彼女は生い立ちの不幸から、そしてより直接的には生育の過程で人格的な信頼の対象となる存在を持ち得なかったことから、他者の意図を曲解することを習慣化し、常に他者を自分に対しての冷笑的な迫害者として見るようになってしまった。そして、そのような固定化され単純化された解釈によって保障された偽の自己優越の幻想の中に閉じこもって自らを保護しようとする存在となったと考えられる。

その自己を閉鎖する自己成型の構造について、彼女自身がどの程度意識的なのかは作品からは最終的な判定は出来ない。いずれにしても彼女が、そうしないではおれない程の不安定さを内部に抱えている存在であることは疑いない。ウェイドがタティコラムという自分の世界観への同調者を求めるのは、彼女の抱えるその精神の不安定さに起因しているであろう。彼女が自らの解釈の妥当性に真に満足しているならば、外に同調者を求める必要はないはずだからである。彼女が自分の世界に引き込もうとする孤児タティコラムと実際に一時的にそうなるように、彼女の見方が共有された時、ウェイドの解釈の妥当性は確認され、実際の現実から切り離された彼女の閉塞世界は強化される。その結果ウェイドが彼女の世界の外に他者の存在を認めて、自己自身を変えていく可能性は失われる。なぜなら彼女の考えに同意したタティコラムの中に見いだせるのは、結局はウェイド自身の考えであり、ウェイドは鏡をのぞき込んでいるのに過ぎないからである。彼女が彼女自身を見つめる鏡において、彼女の知りえない他

者は不在となり、ただ彼女一人がその切り離された世界に取り残されていく。実はこのウェイドの生きる絶対的な懐疑に基づいて構築された他者不在の世界こそ、逆説的に、いくつかのディケンズ作品に共通する重要なテーマである信頼の問題を考える際の端緒とすべき地点だと考えられる。

ウェイドにおいて典型的な、関係性にまつわる疎外状況、全面的な懐疑とも呼びうる状態はディケンズの他の作品の、全く異なった環境に置かれた人物の精神にも認めることが出来る。少なくともその方向性においてウェイドと共通する精神的傾向を持った複数の人物の姿を『遺産』という作品の中に見いだすことが出来る。一人目は、自分にうるさく質問を繰り返す幼いピップに対して「質問をしなければ嘘をつかれない」「Ask no questions, and you'll be told no lies.” (GE 33) と答える人物である。この考えは、その発言者ピップの姉ジョージアナ Georgiana が見る世界とウェイドの世界の近似性を示唆するものであるように思われる。ピップの姉の生い立ちについての私の推定(中村「名前のない痛み」参照)が正しいとすれば、暴力によって虐げられた経験を通して、ジョージアナが他者への適切な信頼を失ったまま生育していた可能性が強く推定される。彼女もまた信頼の対象を持ち得ない悲惨な環境に育ったという意味で、シルヴァーマンやマグウィッチに近い人物だと想像できる。「質問をしなければ嘘をつかれない」。質問をしても嘘だけが返ってくるような、信頼が決定的に欠如した状況。それがピップの姉の置かれた状況であった可能性がきわめて高いと考えられる。

一見、周りの人々に冷笑を含んだような余裕を見せるウェイドと、粗暴な振る舞いを続けるピップの姉の姿は、他者への態度の洗練の度合いにおいて全く逆のように見えるが、姉の暴力が目指すものが何かを考慮に入れると、二人の精神の近似性に気付くことができるかも知れない。姉の暴力の目的。それは、彼女の夫ジョー Joe の指摘から知ることが出来る。

“Your sister is given to government.”

“Given to government, Joe?” I was startled, for I had some shadowy idea (and I am afraid I must add, hope) that Joe had divorced her in favour of the

Lords of the Admiralty, or Treasury.

“Given to government,” said Joe. “Which I meantersay the government of you and myself.”

“Oh!”

“And she an’t over partial to having scholars on the premises,” Joe continued, “and in partikler would not be over partial to my being a scholar, for fear as I might rise. Like a sort of rebel, don’t you see?” (GE 63)

「ピップと自分自身への支配」“the government of you and myself”（上記引用参照）。ジョーはピップの姉が暴力を振るう理由を、家庭内の関係において支配者 master-mind (GE 64) となるためだとも説明している。では彼女は何故「支配者」になってジョーやピップを「統治」せねばならないのか。ジョーも、ディケンズもその理由については立ち入った説明をしようとしませんが、私の推定に従えば、それは彼女の生育環境に起因すると考えられる。「一種の反乱者のように」Like a sort of rebel（上記引用参照）他者を見てしまい、自らに抵抗する存在を蛇蝎の如く嫌うピップの姉。他者の態度に対してそのように過剰に反応させるものは、彼女が家庭内で経験した虐待を想定すれば比較的無理なく理解できる。過去に受けた虐待の経験故に、心の平安を得ることが出来るのが、他者が事実上不在となる空間においてだけである可能性が高い。誰か自分の意志に逆らう者がいるとき、彼女の脳裏には、過去において彼女に対し暴力を振るい続けた虐待者の姿が想起される。それ故、彼女は自分に向けられたのと同じ手段で、自分に抵抗する存在を圧伏し「支配者」にならなくてはならないと考えるのであろう。繰り返される暴力の原因はそれだと考えられる。姉は、ピップやジョーらを恐れているのではなく、彼らの反抗の可能性の中に彼女を虐げ今や不在となった、過去の虐待者の存在を見ているのである。

虐待のトラウマによって、今や現実には存在しなくなった虐待者が、亡霊として彼女の前に姿を現すのである。彼女が争っている相手は実は亡霊なのである。『大いなる遺産』においてシェイクスピア Shakespeare の『ハムレット』Hamlet が繰り返し暗示されるのは偶然ではない。そしてその過去の亡霊の存在

は、墓の影から死者が蘇えるように現れたマグウィッチに遭遇したピップ (GE 24) や、死の床で目撃したハヴィシヤム Havisham とおぼしき白衣の生き霊におびえた義理の弟アーサー Arthur (GE 321) にのみに関わるものでもない。亡霊としての父は、読み手に見えないところでピップの姉に現れ続けていたと考えるべきである。この過去の亡霊を調伏しなければ、姉の精神に真の平安が訪れることはない。暴力は実の所、ピップの姉が望む状態を作り出すための、効率的とはいいがたい手段に過ぎない。誰も彼女に逆らわない状態。いかなる反逆者も存在しない空間。彼女が暴力を振るうのは、その状態を希求するが故である。そう考えると、ウェイドの全面的な他者への懐疑の視線が生み出す彼女自身が常に他者に優越する世界と、ピップの姉の暴力が充滿する世界が、その本質において意外に近いものであることが理解されるだろう。彼女らが「支配者」になることを望むのは、彼女らを虐待しかねない脅威としての他者への恐れのためだと考えられるのである。

他者の存在への恐れ。信頼の置けない他者は自己にとって常に脅威でしかない。信頼を置くことができない以上、他者は彼女らの世界において不在とならねばならないのである。この他者への不信が二人の女性を突き動かす共通の動機だと考えられる。二人において、安心は他者の不在によってのみ担保されるものなのである。狭い家庭内の世界において、暴力という直接的な手段で他者を圧倒することで、自己のみが存在する世界を作り上げようとするピップの姉に対して、ウェイドの戦略は高度に巧妙で洗練されたものとなっている。彼女の戦略は広い世間全体に対して適用可能な一般性を持つ。あらゆる周囲の人々に内在する行動原理を発見したと考え、その原理に従って動く一種の自動人形として他者を見なすことによって、彼らに対しての持続的かつ普遍的な優越を保持しようとしているのである。おまえらがどう振る舞うのか、私はあらかじめ知っていたのだ、と。彼女が出会うすべての他者が、その解釈によっていわば彼女の世界の支配下におかれ、予測可能であったという意味で脅威ではないと見なされる。冷静で一見反駁が不能な程に強固な自己意識内部の解釈の世界において（「自己虐待者」の章を読んでいる間読み手がそうなるように）、他者のより客観的な声と解釈は徹底的に排除されていく。他者が彼女に影響を与え

る可能性が、理論上排除された世界を彼女は生きていると言っても良いであろう。逆に言えば常に他者をそのようにして理論上排除しない限り、彼女に精神的な安定は訪れないのであろう。それほどまでに彼女は他者を信頼できない病んだ精神の持ち主であり、彼女にとって他者は常に脅威でしかあり得なくなっている。

他者の不在となった空間を作り上げたという点において、もう一人の『遺産』の中の人物ほど典型的な例はディケンズの他の作品にも見いだせないだろう。ある意味で戯画としか見なせないほど、ハヴィシヤムの他者の存在に対する拒絶は徹底している。コンピソン Compeyson から裏切られた時間に時を固定し、光の射さない空間に生き続けながら男性全体への復讐を誓う姿は、社会と他者への拒否という点で象徴的である。その意味でハヴィシヤムの作り上げる密室においても、ウェイドやピップの姉の持つ精神と共通の構造が顕在化していると考えることが出来る。特にウェイドの態度とハヴィシヤムの態度は、ピップの姉にあった暴力という直接性が除去され、現実を自らの解釈によって固定化しようとしているように見える点で非常に近似した印象を与える。

一見二人の他者否認は真逆の手段によって達成されているようにも見える。ウェイドのそれは偶発的に知り合いになりうるすべての他者に対しての防衛的な意味合いが強く、他者への全面的な懐疑によって成り立っている。それに対してハヴィシヤムの世界は、彼女の支配するより安定した隠遁状態において作り上げられている。^(註1) 彼女は不特定多数の人間に出会う必要はなく、自分の選んだ人間だけを身近に呼び寄せる事が出来る。引きこもった安定した世界から、彼女は男性という自分を裏切った抽象的存在を憎悪する特権を享受するのである。なにより彼女は彼女の抱いた確信、すなわちすべての男性の不実さ、を根拠とした閉じた世界を作り上げている。しかしその強い確信は、実の所、他者への信頼の欠如という意味でウェイドの全面的な疑念と全く同質のものなのである。コンピソンが不実であったから他の皆が不実であるという結論は必ずしも導き出すことは出来ない、ということは彼女も本当はわかっていたのではないか。他者の不在をもたらす全面的な疑念と全面的な確信によって、二人は共にピップの姉同様、自らの世界の「支配者」となろうとしている存在なの

である。

ハヴィシヤムやウェイドらが排除することに成功している他者とはどのような存在なのであろうか。その答えを考えると、ウェイドの全面的懐疑やハヴィシヤムの全面的確信、あるいはピップの姉の全面的暴力などとは異なる、他者への態度がありうることを、『デイヴィッド・コパーフィールド』*David Copperfield* (以下『コパーフィールド』と表記) から学ぶことが出来るかも知れない。この作品において理想と見なされるのは他者への信頼という態度である。ただし、急いで付け加えれば『コパーフィールド』には繰り返し信頼というテーマが現れているが、あくまでそれは一種の理想に過ぎず、物語の中心には存在していない。信頼に基づいた関係は、この物語の最後に至ってアグネス Agnes と主人公の間に形式的に達成されるか、或いはストロング Strong 博士とアニー Annie という若妻の間の関係として、主人公が目撃する他者の経験として描かれるに過ぎない。この作品でも、繰り返し物語内において実際に描かれているのは、信頼が裏切られた状態、信頼が崩壊していく様であり、信頼の成立しない、いわばハヴィシヤムやウェイドが経験するのと同質の人間関係であることは変わりはない。

ただしこの作品においては、既に見たような他者不在の状況を達成しようとする人物の姿はほぼ見あたらない。登場人物らは例外なく他者と接触し他者と関係を持つとする。ただ、その関係のあり方は理想とされる信頼とはほど遠いというより、信頼が成立しない関係が反復されていくと言える。繰り返される絶え間ない出会いのほぼすべてにおいて、信頼は意図してあるいは意図に反して裏切られ続けていく。スティアフォース Steerforth へのデイヴィッド David の信頼は繰り返し裏切られる。デイヴィッドのもたらした情報をもとにメル Mell 先生(彼のデイヴィッドへの信頼も同時に裏切られる)は学校を追放され、さらにスティアフォースはデイヴィッドの紹介によって知り合ったエミリ Em'ly を誘惑し結果的にデイヴィッドにとって大事なペゴティ Peggoty 一家に耐え難い苦痛を与えるに至る。スティアフォースによって加えられたローザ・ダートル Rosa Dartle の唇の傷は、彼女が受けた精神的苦痛の象徴であろう。ローザはこの傷にも関わらずスティアフォースに強い関心を抱き続け、彼の不

在の世界を生きようとはしない。むしろ自分を傷つけた男性に対して固着し続けているように見える。また、このような繰り返される裏切りによって信頼が崩壊するだけでなく、様々なレベルで信頼の成立しない関係が物語内部に充満しているように見える。

興味深いのは、理想である信頼関係が成立しないとき、一方が他者を支配するような強制を含んだ関係が取って代わっているように見える点である。これはある意味で結果として、ピップの姉の作り上げる暴力による世界に近いが、しかしここでの暴力は身体的なものではなく、精神的な暴力と呼んで良いかも知れない。例えばデイヴィッド自身が成長の後に自らの最初の妻ドーラ Dora に対して行う行為がその一例である。理想の妻に到達しない彼女に対して、彼は容赦なくあるべき姿を要求し続け妻を苦しめ続ける。実は自分のその行為が、自らの幼少時に義父マードストーン Murdstone が自分の妻に対して行った行為に酷似している事を、デイヴィッド自身はどの程度意識しているのだろうか。彼は義父が行った虐待を、結局自らの妻に対して繰り返しているのである。即ち自己の望む理想の押しつけを行い、その事によって相手を苦しめる。自分自身もまたマードストーンから幼い頃に虐待とも言えるような扱いを受けるが、結果的に自らも他者に対して自らがされたのと同様な行為を反復してしまっている。いわば、ありのままの他者を受け入れることが出来ず、他者自身の自画像に自分がそうあるべきと信じる理想像を塗りつけようとするのである。このような他者への理想の押しつけは、ピップの姉の場合のような身体的な暴力を伴ってはいないが、結局自分の求めるものを押しつけて、他者のありのままの存在を減しようとしているという意味で、他者の不在を目指すものとなっており、その意味で他者に対して「支配者」になろうとするピップの姉の行動に非常に近いと言える。そして他者の不在を通して他者の集合体である世界に対して「支配者」として存在しようとする点で、デイヴィッドのドーラに対しての行為は、ハヴィシャムやウエイドやジョージアナのあり方にもつながっていると考えべきであろう。いずれもが他者不在の世界を生み出す契機と見なしうるのである。

だとすれば、そのような他者不在の世界を生み出す他者への態度と『コパー

フィールド』において理想として提示される信頼に基づいた態度との違いを考えることが、ディケンズ作品における信頼とは何かを定義する際通らねばならない重要な過程であると言えるだろう。

信頼と確信

既に引用したギデنزによれば、信頼はただ人間がその生育過程の最初の「保護被膜」として獲得すべき能力に留まらず、近代社会を生き抜くために人が身につけなくてはならない重要な能力であるとされる。彼によれば、信頼とは神が不在となった時（すなわち近代社会が始まったとき）、人が必然的に必要とした重要なものであった。近代社会における信頼の重要性は、神と安定した関係を結ぶことが出来ていた時代が過ぎ去り、いまや人間が自分自身の予想や信念に基づいて対応しなければならぬ世界が現れた事と大きく関わっていた。近代社会とは、予測が裏切られる可能性、すなわちリスクを取り込む形で人が未来と直面せざるを得ない社会であった。

近代以前、人々は主に神への信仰という確信によって現実と向き合えば良かった。現実には神の意志の表れであり、いかなる結果を得ようとそれはいわば神の御心であり、ただ人はそれを受け入れればよかった。どのような結果にせよ然るべき世界が人の前に現れたのに過ぎなかった。神の存在と意思により現実の正当性ともいうべきものは保証されていたのである。伝統的な社会においては、人は未来を自らの手によって変えようと努力する必要も、また結果を予想してあらかじめ保険をかけ、予想通りでなかった場合に対応する必要にも迫られていなかった。人の自然な願いがあり、それに対する答えとしての現実が神の応答として人に訪れる。近代以前、人と現実との関係はそのように単純で、ある意味で皮相であり、結果的に人の精神を未来の植民地化を目指して絶え間なく稼働させる事を強いるようなものではなかった。ハヴィシャムがコンピソンに対してするように全面的に崇拜をしていれば事足りたのである。それは人にある意味で穏やかに自己責任を免れて生きる事を保証する、より単純で安定した構造を備えた現実であった。

近代の訪れと共に神の存在が乗り越えられた時、絶えずリスクを考慮しないでは取り扱うことの出来ない現実が人の前に姿を現した。その時、単純な確信では現実に対応することは不可能となっていく。そこで確信ではなく信頼が必要とされたのである。ギデンズはルーマンの議論を援用しながら、この信頼 trust と確信 confidence の違いについて以下のように説明する。

Trust, he [Luman] says, should be understood specifically in relation to risk, a term which only comes into being in the modern period. The notion originated with the understanding that unanticipated results may be a consequence of our own activities or decisions, rather than expressing hidden meanings of nature or ineffable intentions of the Deity. "Risk" largely replaces what was previously thought of as *fortuna* (fortune or fate) and becomes separated from cosmologies. Trust presupposes awareness of circumstances of risk, whereas confidence does not. (*The Consequences of Modernity* 30-31)

未来に対するリスクを考慮に入れた態度としての信頼。リスクを考慮に入れない態度としての確信。信頼とはリスクを考慮に入れた近代的な（神の存在しない世界において当然必要とされる）態度だと考えられる。「自然の隠された意図や言うに言われぬ神の意志」（上記引用参照）などではなく、「自分自身の行動や決断の結果」（上記引用参照）として現実が生じているという認識が人の間で広く共有される。リスクの感覚はそこに起因する。人自身の行為と決断が生み出していく現実。予兆されず大きな意志や枠組みが与えるのでもない、自分や相手の行為と決断によって生み出され、また変えられるものとしての現実が人の前に姿を現した。それは自分自身の決断に大きな責任が存在する世界だとも言える。中世的な信仰の基盤があった世界観、すなわちあらかじめ大いなる意志によって定められているものとしての現実とは、決定的に異なった可変性を備えた現実が目の前に生じているという認識が人々の間に広がっていった。捉えがたく予想できない意外さを持った、同時にあらかじめ決定などされてお

らず様々な可能性に対して開かれたものとしての現実。そのような複雑さと可変性に人々は直面することを強いられたのである。簡単に言えば、現実には予想して対応する必要のない、ただ経験すれば良いだけの単純なものから、自らと他者の行為によって絶え間なく変わりうる何かとして人の前にその姿を現すものとなっていったと考えられる。

恐らくハヴィシャムを最も苦しめたのは、現実が彼女の予想を超えて動いたという事だったはずである。まるで「バーナムの森が動いた」という知らせに驚くマクベス Macbeth のように、ハヴィシャムはコンピソンの裏切りに驚く。彼女には自分の信じる以外の世界が現れることを全く予期できていなかった。裏切られる直前までハヴィシャムは、現実が自分の予想を裏切る可能性もありうるという、いわばリスクを想定しその可能性に保険をかけた思考が全く出来ていなかった。ハーバートの父が警告したコンピソンに関する常識的な注意 (GE 177) は、その可能性が示唆された瞬間、神に対しての冒瀆でもあるかのように退けられる。それほどにハヴィシャムにおいては、コンピソンへの全面的絶対的な信奉が存在し、裏切られる可能性というリスクに対応できる思考は不在であった。

裏切りの発覚後に彼女が作り上げたサティスハウス Satis House という世界も、予想されるリスクへの対応が出来ていないという点で全く変わりがないという点に注目したい。彼女が新たに作り上げた世界は、リスクを考慮に入れて対応すべく作られた世界ではない。それはリスクを考慮する必要のないもう一つの世界に過ぎなかった。「質問をしなければ嘘をつかれない」ように、男性を愛さなければ裏切られることはない。コンピソンに対して抱いていた「盲目的献身と疑うことのない自己否認」(GE 177) の代わりにハヴィシャムが築いたのは男性への全面的不信に基づいた世界であった。要するに、一つの確信の世界の代わりに別の確信に基づいたもう一つの世界が築き上げられたのに過ぎないのである。この新しい世界は、今度は男性の全面的な不実を前提にすることで、またも予想がはずれた場合の対処を想定しない世界であった。

ハヴィシャムには、想定がはずれた場合にどう対応するかを考慮に入れなければならない世界を自らが生きているのだという事がのみこめていない。裏切

りが確定した9時20分前という時刻に時を止める事で、彼女は予想し、かつその予測がはずれた際の対応に苦慮し続ける必要に迫られる不安から解放される。現実がリスクを孕んだ根本的に異なるものとして認識されるのではなく、種類の違う、もう一つの信仰の世界が生み出されたのである。目の前にいる男性が、もしかしたらコンピソンとは異なり、善意に基づいたハヴィシャムを深く愛してくれる信頼に足る男性かも知れない可能性は無視され、丁度ウェイドの視線から、彼女のような存在を侮蔑しない他者が消え去るように、他者の反応が予想される世界が生み出された。

確認しておきたいのは、彼女が時間を止める必要に駆られるほど恐れていたのは、コンピソンの裏切りという一個の経験ではなかったという点である。コンピソン個人への復讐ではなく、男性一般への復讐という形に問題がすり替えられている点に注目する必要がある。彼女が恐れたのは、一人コンピソンという男性が信頼出来ないという事実ではなく、あらゆる現実が、コンピソンに対して彼女がそうしたように盲目的に自己を委ねる事を許さないという事態であった。単純な盲信では対応できない現実の複雑さを、彼女はコンピソンの裏切りという事実から直感し、そのような現実の複雑さから逃避しようとしたのだと考えられる。彼女の恐怖の対象は男性の不実ではなかった。それは、あらゆる現実が彼女の予想を超えて動く可能性を秘めていることであった。

ハヴィシャムが男性への憎悪と復讐という生き方を選択して時間を止めたとき手にしたのは、負の方向に極端に色づけられる事でその負の見込みの中に閉じこめられ、いわば単純化されることで予測可能となったいわば矮小化され無毒化された現実であった。丁度ウェイドの懐疑の視線の中で、常に他者が彼女にとって予測可能になるように、ハヴィシャムの全面的な確信において現実は一様になる。どちらの見方も世界からリスクを排除することで世界の変化の可能性を排除し、単純化することでその視線の持ち主に理解可能なモデルを与えるものだった。しかしそのモデルは、リスクを排除することによって予測可能になった、本質的に現実の世界を知るのに役立たない世界モデルでもあった。いわば静止画のようにある瞬間の現実を反映するだけであり、次の瞬間の世界を映し出すことは出来なかった。彼女らの全面的確信と全面的懐疑の視線にお

いて、未来につながる変化の可能性を内包した現実が消え去っていく。時間が固定されているサティスハウスの世界のあり方は、ハヴィシャムの生きる確信の世界の本質を表現しているのだとわかる。それは停止することで彼女に安心を与える現実モデルであった。

ハヴィシャムやウェイド、そしてピップの姉に共通する他者を全面的な悪意と嘲笑の存在として見ようとする行為の根底にあるのは、想定から逸脱する可能性を常に秘めた現実の複雑さと他者という存在の与える救済の可能性を断念し封じることで手に入る理解可能な単純なモデルに従って生きようとする意志であった。『コパーフィールド』において繰り返される他者への理想の押しつけ同様、それは他者が自分の想定通りではない可能性を拒否するという意味で、結果的に現に存在する相手を事実上排除しようとするものとなっていく。逆に言えば信頼とは、意にそまぬ相手の存在をありのままに認めようとする態度だと考えることができる。家政において未熟な妻にいらだつデイヴィッドに対して、ドーラはそうなれない自分の苦しみを誤魔化すように自分の事を赤ん坊妻 child-wife と考えてくれるようにと提案し、その意図をこう説明する。

“I don't mean, you silly fellow, that you should use the name, instead of Dora. I only mean that you should think of me that way. When you are going to be angry with me, say to yourself, 'it's only my child-wife!' When I am very disappointing, say, 'I knew, a long time ago, that she would make but a child-wife!' When you miss what I should like to be, and I think can never be, say, 'still my foolish child-wife loves me!' For indeed I do.” (DC 543-544)

赤ん坊妻という、本来は認めたくない存在を引き受けられたなら、おそらくデイヴィッドは自分以外の存在を本当の意味で受け入れられたはずである。それをリスクという観点から言い換えるならば、相手から生じる予測不能の、自分には容認できない要素を引き受けようとする態度である。戯画的に単純化されたディケンズの描く人間関係に従って判断するならば、信頼とは、他者が自分にとって不快な事を指摘し実行する可能性を残すような関係であり、自己の

理想を当然視しない態度であると言えるかも知れない。相手という、必ずしも理想通りではない現実を受け入れ、その他者の存在のもたらす予測不能性によって、自分自身に変化していく可能性を受け入れる態度だと言っても良い。これは全面的に相手を支配したり、あるいは逆に相手に全面的に支配され依存するのは決定的に異なった関係のあり方である。自己と他者が互いに存在を認め合うことで、次の可能性としての未来に開かれた関係のあり方である。信頼とは、その対象が自己を限定し塑形することに対して自らを開いている状態なのだと言っても良いのかも知れない。それに対してウェイドの巧妙な戦略も、ピップの姉の暴力も、ハヴィシャムの盲目的な確信も、それが高度に他者の存在を排除するが故に彼女ら自身が変化する可能性を失わせるものでしかないのである。

ハヴィシャムは極端な希望のない世界を描くことで、リスクを織り込んだ現実への対応という近代社会に生きる人々の通常のあり方を免除され、いわば中世的な宗教共同体にいた人々がキリスト教を信仰するように、不動の真理としての確信の中に生きることが可能になる。彼女の抱くような確信とは神なき世界に於ける信仰なのである。リスクとは、自分だけの確信が充満する状態からは出てこない何かである。全面的な懷疑や全面的な確信を抱くとは、妄想に引きこもり実際に生きることを拒む行為である。そのような妄想に浸る時のみ、人はリスクを考慮する必要を免除される。ハヴィシャムの時間の止まった世界は恐らくそのようにして出来上がっている。人が自分の妄想の中に留まり続けるとき、その閉じられた世界にあるのはただ不毛な、しかし自分に由来するが故に完全に安定した世界である。その閉じられた空間には、真の意味の他者、自己が知り得ない要素は不在となり、それ故に自分にとって異質なものを、受け入れたいものも不在となって安心を得られるのと同時に、自分の知り得ない要素によって新しく自分が変わっていきける可能性が閉じられてしまい、自己は無限の不毛な循環を反復するしかなくなっていく。終わりと変化のない反復。ハヴィシャムやウェイドやピップの姉の世界にあったのは彼女たち自身の存在だけであった。リスクとは自己の知り得ない外部としての他者から生まれてくるものであり、リスクを考慮しない信仰に近い個人の確信とは、他者が全面的

に不在となった世界への耽溺を意味する。そこで自分自身というあらかじめ知っている存在を繰り返し経験し続けることである。ハヴィシャムらが生きるあの時間の止まった世界はそのような構造を持ったものだったと考えられる。

ハヴィシャムもウェイドも自分自身の意識がすべてであるような空間を作り上げる。結果として他者は事実上不在となるのである。ウェイドがいわばその完成度の高さによって他者との結びつきという意味での救済の可能性が限りなく失われた症例だとすれば、ハヴィシャムはエステラやピップという闖入してきた子供の存在によって、自らを閉じこめた空間から外の世界、彼女が独り決めたのとは違う可能性をかいま見ることが許される。従ってエステラがハヴィシャムに抗った時、ハヴィシャムは自分を変える可能性を与えられたのだと言って良いであろう。ハヴィシャムはさらにピップに加えた苦痛についても認め、それに対して許しを請うことで、想像できる他者の痛みを通して他者の存在を最終的には認めるに至っている (GE 177)。「私はあなたを許す」という言葉は、自分の外の世界に自分が傷つけた、自分と同じ苦しみを経験した人間がいたことの確認の文書でもあった。初めてエステラが逆らった後ハヴィシャムのエステラへの態度に恐れのようなものを彼女が抱いた瞬間をピップは目撃する (GE 287) が、ハヴィシャムが恐れていたのは、彼女の確信を超えたものが現れたことであつたと考えられる。

(註1)

『遺産』におけるハヴィシャムもまた彼らと共通する欠損を抱えていた可能性がある。その原因は、幼い赤ん坊のうちに母を失った (GE 175) 事と、その事が誘因したかも知れない過剰で不適切な養育が複合的に寄与していたのかも知れない。彼女が甘やかされた子供だったというハーバートの証言 (GE 175) を信じるならば、母を失ったという不幸故に父親から過剰な自己の横溢を奨励された結果、ハヴィシャムは他者との適切な関係性を持つことに失敗してしまったのかも知れない。さらには、過剰に甘やかされたあげくに、父による裏切りとも言えるような下位の階級の女性との秘密にせざるをえないような再婚が、彼女に唯一の信頼の対象だった父親に対しての信頼を失わせてしまった可能性はある。ハヴィシャムの精神の持つ問題も、ジョージアナの場合同様父親との関係に由来するものなのかも知れない。

参考書目

- Dickens, Charles. *David Copperfield*. New York, W.W.Norton and Company, 1990.
- . *Great Expectations*. New York, Bedford Books of St.Martin's Press, 1996.
- . *Little Dorrit*. Oxford: Oxford University Press, 1979.
- Giddens, Anthony. *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford, California. Stanford University Press, 1991.
- . *The Consequences of Modernity*. Stanford, California. Stanford University Press, 1990.
- Leavis, F. R. and Leavis, Q.D. *Dickens the Novelist*, New Brunswick, New Jersey. Rutgers University Press, 1979.

日本語の参考書目

- 中村英男 「名前のない痛み——暴力、紳士、そしてセクシュアリティ」、1頁－24頁。『人文学報』第494号(英文学)、首都大学東京人文科学研究科、2014年3月。

Trust and Confidence in Charles Dickens

— Wade, Havisham, and Georgiana